

第20回 発掘レポート最前線！

－令和7年度北九州市遺跡発掘報告会－

日時： 令和8（2026）年3月8日（日）13：30～15：00

会場： 北九州市立生涯学習総合センター 3F ホール

（〒803-0811 北九州市小倉北区大門一丁目6番43号）

〈プログラム〉

13：00～	受付開始
13：30～13：35	開会挨拶
13：35～13：50	報告①令和7年度発掘調査概要
13：50～14：40	報告②石田・原遺跡第7地点5区
14：40～14：55	質疑応答
14：55～15：00	閉会挨拶



令和 7 年度発掘調査概要

1. 菅原神社遺跡 11 区・12 区

菅原神社遺跡 11 区・12 区は、八幡西区堀川町に所在する遺跡です。遺跡は東側を堀川が流れる低地に位置しており、調査区は南側に 11 区、北側に 12 区と 2 つに分かれています。また、調査区は JR 筑豊本線の旧線路用地内および隣接する宅地にあり、北には JR 折尾駅が位置しています。なお、11 区の西部と 12 区の調査は令和 6 年度に終了しているため、令和 7 年度では 11 区の東部の調査を行いました。

11 区・12 区ともに近代の整地層を挟んで、上下 2 面を確認しました。近代整地層の上（上面）では近代の石組溝、礎石、埋甕、井戸などが検出されました。石組溝、礎石、井戸側は周辺で産出される砂岩が主に使用されています。また、近代整地層の下（下層）では遺物包含層、杭列、溝状遺構などが検出されました。

遺物は 11 区の溝状遺構から 6～8 世紀頃と考えられる須恵器や土師器、土錘などが出土しています。この溝状遺構は自然流路と考えられています。また、遺物包含層からは 6～8 世紀頃と中世の遺物が出土しています。なお、中世の遺物には白磁や青磁、青花の碗・皿などの輸入陶磁器が一定数含まれていました。中世の遺構は調査区内では確認されていませんが、遺跡が位置する折尾周辺は麻生氏の所領であったことから、近隣に麻生氏と関連のある建物が存在していた可能性が高いことが考えられます。

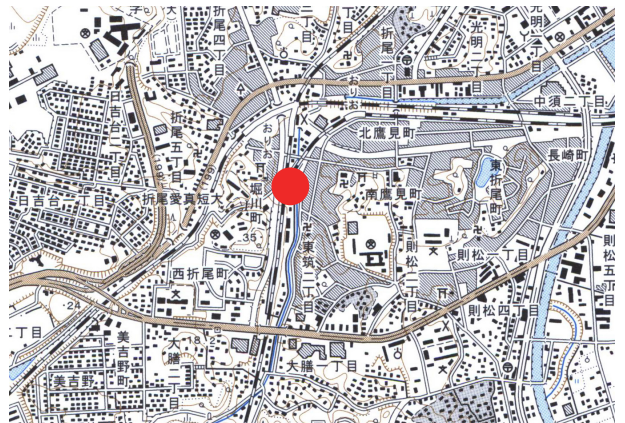
2. 穴生諏訪遺跡第 2 地点

穴生諏訪遺跡第 2 地点は、八幡西区穴生二丁目に所在する遺跡です。遺跡は洞海湾の最奥部にあり、割子川の東岸に位置しています。近世の耕作土と近代の造成によって 2 m ほど高上げされており、現在の標高は約 5 m です。

近世の耕作土の下には遺物包含層が堆積しており、この上面で遺構を検出しました。東端部で確認された溝状遺構は近世の遺物を含んでおり、当該期の遺構だと考えられています。

遺物包含層は 1～3 層からなり、1 層からは中世の瓦質土器や青磁碗などが出土しました。2 層は古墳時代の遺物が主体ですが、わずかに須恵器の碗や坏と思われる古代の遺物を含んでいます。また、3 層は古墳時代の土師器のみが確認されました。この遺物包含層は調査区全体に堆積しており、1 層は小破片が全体的に出土しています。2・3 層では場所によって遺物の出土量に粗密があり、特に 3 層は残りのよい遺物が集中し、土器溜りが確認できました。

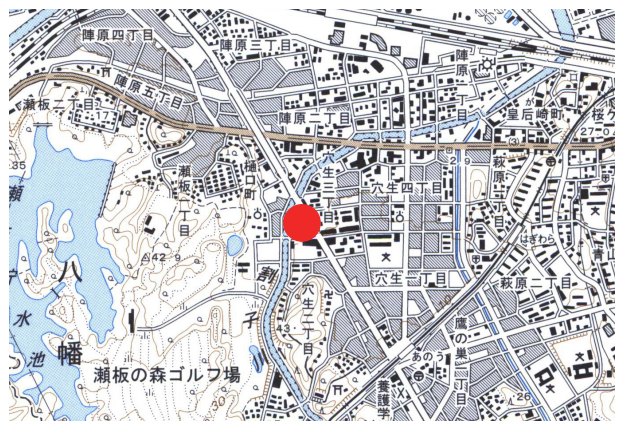
遺物包含層の下位は基盤層であり、この面で自然流路を検出しました。自然流路の覆土は上下 2 層を確認しており、特に下層の砂礫層には完形品の土師器が多く含まれていました。なお、遺物包含層 3 層で検出した土器溜りはこの自然流路の岸部分に位置していることから、意図的に置かれたものである可能性があります。これらの状況から、確認された自然流路は集落に近接していたことが想定されます。



第 1 図 遺跡の位置 (1/25,000)



第 2 図 遺跡の全景写真（上が北）



第 1 図 遺跡の位置 (1/25,000)



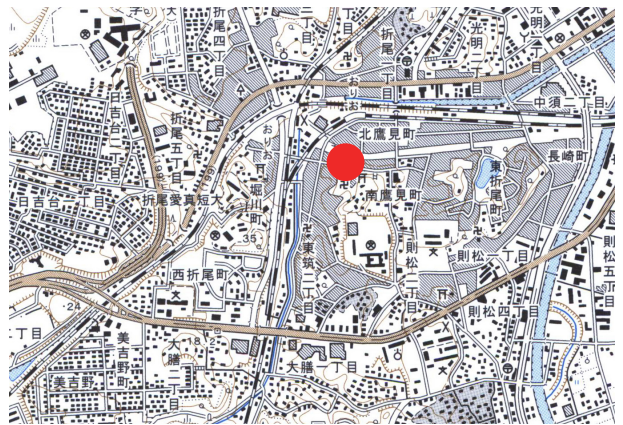
第 2 図 遺跡の全景写真（上が北西）

3. 末里遺跡 2 区

末里遺跡 2 区は、八幡西区南鷹見町に所在する遺跡です。遺跡は洞海湾の最奥部と遠賀川に挟まれた低丘陵上に位置します。

調査区の大部分は軟質の砂岩を基盤とし、南から北に向かって下る斜面に位置します。南側ではこの斜面が 4 段に削られ、それぞれの段の直下には溝状遺構が確認されました。また、中央付近には 2 基の井戸が確認されています。1 号井戸は基盤である砂岩を削り抜いた素掘りの井戸で、事故防止のため底面を確認することはできませんでしたが、深さ 3 m 以上を測ります。側面には横穴状のピットが縦に並んでおり、それが東西の相対する位置に配置されていることから、昇降する際の足がかりであると考えられます。2 号井戸も素掘りの井戸ですが、深さは 2 m ほどでした。

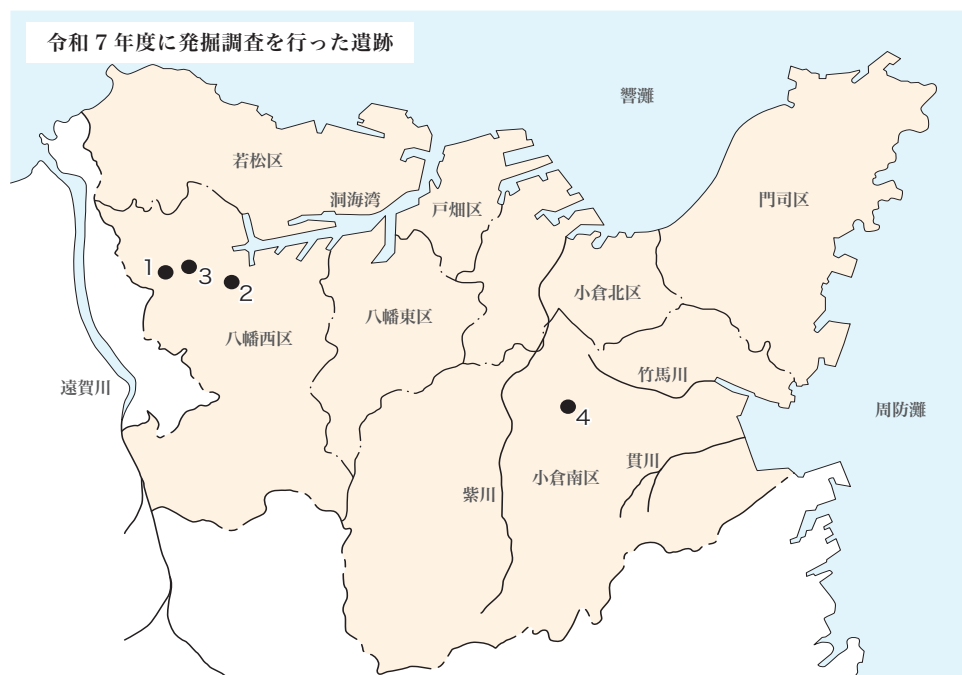
北東側には遺物包含層を含む 7 層の堆積層が確認されました。出土遺物には平安時代～鎌倉時代と考えられる土師器や黒色土器、玉縁口縁の白磁碗や鎬蓮弁文青磁碗などがあります。なお、この遺物包含層の 7 層と基盤層（8 層）の上面でピットを中心とした遺構を、1 層の上面にて 30 号土坑を確認しました。30 号土坑には 18 世紀代の陶磁器が多く含まれていました。これらのことから、本遺跡は古代～中世の集落内に位置していることや、鎌倉時代頃までに北東側の斜面が大量の土砂で埋没していたことが確認できました。



第 1 図 遺跡の位置 (1/25,000)



第 2 図 遺跡の全景写真（上が南）



No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	主な時期と遺跡の内容
1	菅原神社遺跡 11 区・12 区	八幡西区堀川町	R6.10.15 ~ R7.2.28 R7.4.3 ~ 5.2	2,930 m ²	古墳～近代 集落跡
2	穴生諏訪遺跡第 2 地点	八幡西区穴生二丁目	R7.5.15 ~ 6.30	660 m ²	古墳・古代～中世・近世 自然流路跡
3	末里遺跡 2 区	八幡西区南鷹見町	R7.9.29 ~ 11.21	720 m ²	古代～中世・近世 集落跡
4	石田・原遺跡第 7 地点 5 区	小倉南区 石田南二丁目	R7.12.15 ~ R8.2.10	2,522 m ²	弥生・古代～中世 集落跡

※総面積は 6,832 m²

石田・原遺跡第7地点5区

1. はじめに

石田・原遺跡第7地点5区は小倉南区石田南二丁目に所在し、貫山山麓丘陵の東端に位置します。すぐ西側には竹馬川の支流である石田川が北流し、この川に沿うようにしてJR日田彦山線が南北に延びています。調査区の現地表は標高約23～25mで、川に向かって下る斜面となっており、調査区の西端付近では約5mの高低差を持つ崖を形成しています。石田地区ではこれまでも多くの発掘調査が行われており、弥生時代を中心として縄文時代から中世までの遺跡がみつかっています。今回の調査では主に弥生時代の遺構と遺物が確認されました。

2. 調査内容

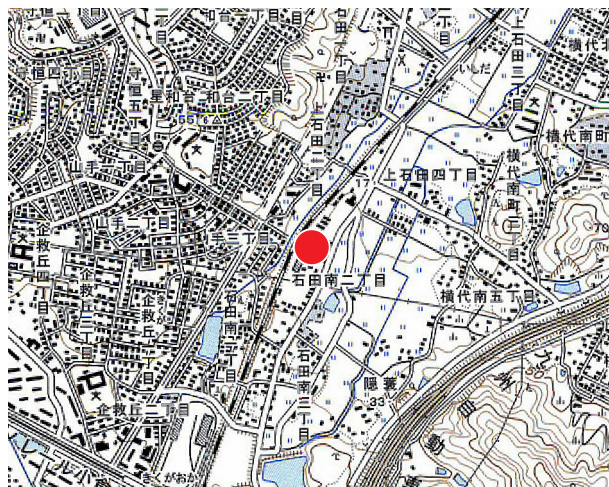
調査区は工場の跡地のため既存建物のコンクリート基礎によって大きく攪乱されていましたが、東西2箇所集中して遺構が確認されました。確認された遺構は竪穴建物、掘立柱建物、土坑、土器棺墓、溝状遺構、ピットなどです。そのほとんどは弥生時代のものと考えられ、弥生土器を中心とした多くの遺物が出土しています。

①竪穴建物

今回の調査では5軒の竪穴建物が検出され、平面形が方形と円形のものが確認されています。

2号竪穴建物は西側が削平され、北側は調査区外となっていますが、建物の南東側の一部が確認されました。建物の内部には炉跡と考えられる表面が赤く焼けた窪みがあり、ここに炭層が溜まっていました。弥生時代の竪穴建物において炉は建物の中央にあることが多く、炉跡と残存する壁面までの距離を測ることで、建物全体の規模を推定することができます。今回確認された2号では炉跡の中央から建物壁までの距離が南辺壁・東辺壁共に2m20cmを測るため、その平面規模は4.4m四方の方形であると考えられます。また、この炉跡から60cmほど南側には柱を据えるための柱穴が確認されています。この柱と炉跡の位置関係から見ると、この建物は2本の支柱で屋根を支える構造であったと考えられます。また、建物の南側にはベッド状遺構と呼ばれる床面よりも一段高くなっている部分を確認しました。この段は建物南辺壁に沿って幅90cmで設置され、高さは約10cmです。炉跡との位置関係から考えると北側にも同じようにベッド状遺構がある可能性があります。東辺の壁際中央において確認された土坑ははっきりとした用途は不明ですが、これまでの類例から出入口に設置されるものです。つまり、この建物は東側に出入口があったことが想定されます。なお、この建物内からは弥生時代終末期の土器が多く出土しており、この時期に作られた竪穴建物だと考えられます。

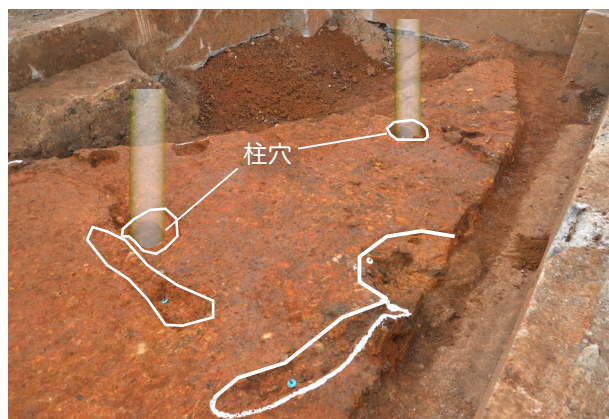
また、この2号竪穴建物の南東側で確認された11号溝状遺構は、2号竪穴建物の壁に平行して延びており、この建物に付属する遺構だと考えられます。竪穴建物は竪穴を掘る過程で発生した土砂を周囲に盛り上げて土手を作ることが想定されています。そうしてできた土手の外周には排水用の溝を巡らすことがあり、11号溝状遺構はこれに当たるものだと考えられます。そ



第1図 石田・原遺跡第7地点5区位置図 (1/25,000)



第2図 石田・原遺跡第7地点5区全景 (俯瞰写真、上が東)



第3図 1号竪穴建物掘削状況 (南東から)

うであれば、2号竪穴建物と11号溝状遺構の間にも土手が作られていた可能性があります。

1号竪穴建物は2号の南側に位置しています。コンクリートの基礎によって大きく壊されていますが、建物壁際に巡る細い溝状遺構とベッド状遺構が確認されたことで竪穴建物であることがわかりました。炉跡は検出できませんでしたが、東側にある溝状遺構に接して土坑が1基確認されています。そのため、この部分が出入口であると考えられ、2号と同様に東向きに出入口が開口していたことが想定されます。加えて建物全体の方向性も2号と同じであるため、1・2号は同時期に存在した建物だと考えられます。なお、1号では2基の柱穴が検出されましたが、全体の位置関係から考えると、2号とは異なり4本柱の可能性もあります。

5号竪穴建物はほとんど床面しか残っていない状態でしたが、円形に巡る溝状遺構と炉跡が検出されました。この溝状遺構は2号竪穴建物と重なる位置で確認されており、炉跡は2号によって壊されています。このため、5号は2号よりも古い遺構であることがわかりました。一般的な「すまい」として使われる竪穴建物は弥生時代後期になると平面形が円形から方形に変化することがわかっています。北九州市内においても同様の傾向が確認されていることから、5号は少なくとも中期以前に作られたものと考えられます。

4号竪穴建物は平面形は不整形で、炉跡や柱穴なども確認できませんが、壁面の立ち上がりがしっかりとあり、竪穴建物の一つとして考えています。この建物の中からは数多くの弥生土器が出土しています。土器は割れた破片が多く、そのほとんどは弥生時代中期のものです。このため、割れて使えなくなったものがこの場所にまとめて廃棄されたものと考えられます。

②土器棺墓

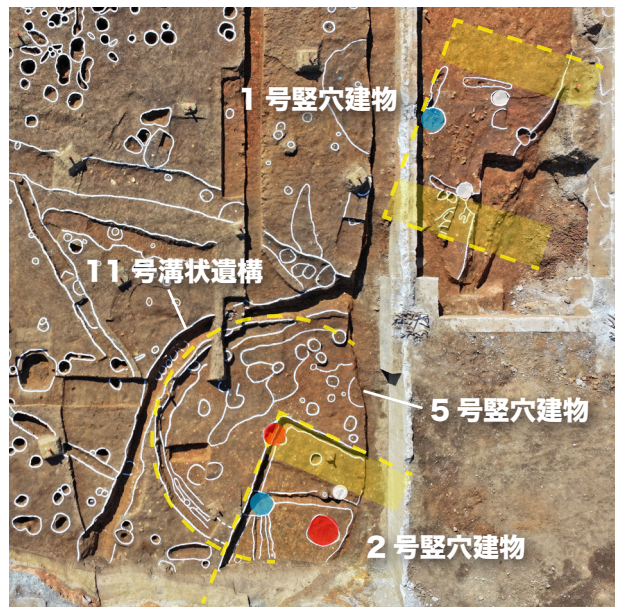
今回の調査では1基の墓を確認しました。これは土器棺墓と呼ばれるもので、弥生土器の甕や壺などを用いて棺とするものです。確認された土器棺は大部分が壊されているものの、わずかに残った破片の位置関係から、2つの甕の口同士を合わせて横向きに埋められていたと考えられます。なお、甕の大きさから、乳児が埋葬されていたことが想定されます。

③遺物包含層

遺物包含層は土器などの遺物を含む土砂で、弥生時代の遺構が作られている地面を覆うようにして堆積していました。この層の中からは古代の須恵器や中世の土師器、青磁碗などが確認されており、古代～中世に堆積したものと考えられます。

3. おわりに

今回の調査では弥生時代中期～終末期の遺物が出土する遺構が多く、この時期の集落が存在したことがわかりました。これまでの石田・原遺跡の調査でも弥生時代前期～中期の集落については確認されていましたが、終末期の状況については不明でした。そのため、終末期の集落については今回新たに確認されたこととなります。また、古代～中世の遺物が出土していますが、古墳時代のものについては確認できていません。これらの状況から調査区付近では弥生時代終末期以降に人々が離れていき、その後、古代になって再び戻ってきたことが想定されます。このことは、今回の調査が石田地区や周辺地域における集落の展開を考える上で重要な成果であると言えます。



第4図 竪穴建物群掘削状況（上が南）



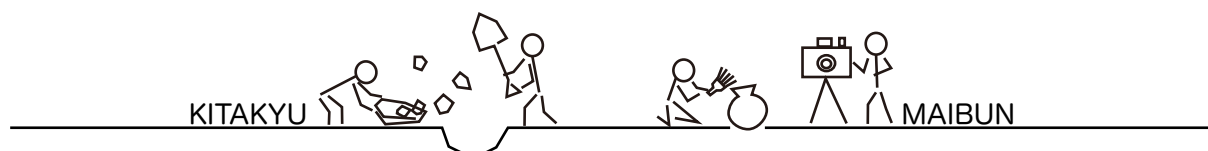
第5図 2号竪穴建物完掘状況（北西から）



第6図 4号竪穴建物弥生土器出土状況（北西から）



第7図 土器棺墓検出状況（西から）



主催 (公財) 北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室

〒 803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目 1-3

TEL 093-582-0941 FAX 093-582-8970

北九州市都市ブランド創造局総務文化部 文化企画課